「和」川柳社　会報　No.六八九

定例会　二〇二〇年二月二七日（木）

皆んなで選んだ今月の秀句

お神輿を担ぐ奴には札の束　遠田亀公子

質問の図星に切れる腐る鯛　周　立東爺

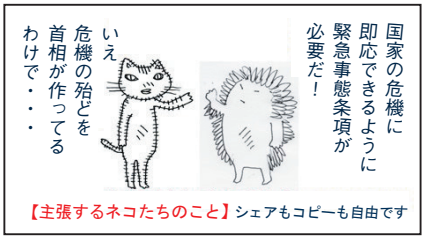
シュレッダーしっかり抱えて答弁し　前田　大峰

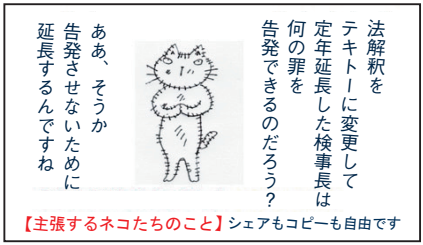
新コロナ世界は一つを教えてる　白山未知子

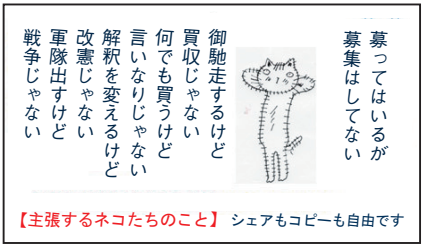
相変わらず政治と金の犯罪が続く政権。国会では腐った鯛が突然に切れる。いつでも公文書を廃棄できるようにシュレッダーを用意し嘘八百の答弁。そして新コロナウイスルが国難を突きつける。（周）

主張するネコたちのこと

facebookで出会った不思議なネコたち。このネコたちに学びたいですね。







◆目次

川柳互選　課題吟「医」　……2
自由吟　……3
自選句・おたより・投稿（若林昌坊）　……5
ほのぼの川柳　……7
自句自解（日下宏）　……7
論考『ますらおぶり』『たおやめぶり』について考える（寺内徹乗）　……8
シベリア抑留の記録⑯　……14
訃報　秋山芳子さん／冨沙子さんがお母さんの最期を綴る　……17
編集後記を兼ねて　……18

例会案内

3月例会　3月26日（木）
投稿締切　23日（月）
課題「学」　3句以内
自由吟　5句以内
自選句、自解筆もよろしく。

2月の川柳互選

◆課題吟「医」

（互選）一人３句以内吐

重曹を飲んで長生き医者要らず　高坊
昼も未だドクターカローシないように　ダン吉
アフガンに中村医師の用水流れ　高坊
ＰＣＲ検査手続き優先命より　未知子
今日内科明日は整形多忙です　北の山
老人死に絶えるまで大病院を打ち壊す　大峰
医仁術　赤ヒゲさんが　増える世へ　宏
北の出稼ぎ大丈夫ですかな新コロナ　未知子
爆買いで　医療福祉は　先細り　馬頭琴
去年今年　薬と医書の　頻度増え　宏
くすりもマスクも無くしてウイルスだけが殖えさかり　大峰
的外れ　国政正す　名医を見つけ　馬頭琴
医療マスク　無いよりマシと　買い求め　馬頭琴
医・厚労　コロナ対策　無策なり　宏

医者の手を汚す堕胎の闇市場　亀公子
医療費が年金の芽を摘み漁る　亀公子
主治医曰く僕も腰痛だと笑う　ダン吉
院内ピリピリ大臣地元でパーティーです　徹乗
診療二分ドクターの目が定まらぬ　ダン吉
クルーズ船客も医者も共倒れ　高坊
地域から医療消し去るアベ政治　林
高齢者　医療難民　格差つき　広助
治療薬　医の算術が　からみ合う　広助
武器を鍬に持ちかえさせた医師一人　徹乗
新型で医療後進国がバレ　白眞弓
医は算術金のない子は見捨てられ　立東爺
コロナにも忖度せよと言ったとか　白眞弓
ウイルスにしかけられた医の崩壊　立東爺
差別して医も算術の道を行く　亀公子
医師の遺志流血となり土に滲む　白眞弓
病院をつぶし安心うばう国　林

9　医の倫理中村師から教えられ　立東爺
9　病む政治最新医学も打つ手なし　徹乗
9　病む国に野党共闘メス入れる　林
10　コロナ菌　医療体制　嘲笑い　広助
12　**新コロナ世界は一つを教えてる**　未知子

◆自由吟（互選）

一人5句以内吐

1　イベントが　中止延期の　コロナ風邪　広助
1　任せると言うてくれたがやかましい　ダン吉
1　検査小出しにし政権安定最優先　徹乗
1　また予算話し断る気なんだな　ダン吉
1　あの顔で証拠出させる申告書　北の山
1　やるだけはやったぞ冬の空仰ぐ　ダン吉
1　桜より安倍をピンチにコロナ風邪　高坊
2　七十年強請られ続ける辺野古基地　大峰
2　国策ジェット　グレタの怒り忘れたか　未知子
2　検察を縛る眠剤送り込む　立東爺
2　どうせならオリパラ止めて新肺炎　白眞弓
2　嘘は罪　首相夫婦は　何罪か　宏
2　政権も　コロナに感染　民放置　広助
2　百発の議論拍手で絞め殺す　ダン吉
2　意味の無いあなたの席を早よ譲れ　高坊
2　戦前は　天長節や　奉持かな　宏
3　コロナさえ陰謀論の反知性　徹乗
3　大詰めか2月の桜何思う　白眞弓
3　長寿国脱落目指す福祉切り　白眞弓
3　そろそろか皆んなが望んだ幕引きを　高坊
3　定年を延長させたく閣議決定　高坊
3　定年を　延ばしてまで　火消し増し　馬頭琴
3　コロナ菌　皇室祝賀　待った掛け　広助
3　インバウンドの金にウイルス付いてくる　未知子
3　コロナ風邪　完治の後に　いじめられ　広助
4　増税の　行きつく先に　兵器代　馬頭琴
4　我が世の春　ウソいつわりで　追い求め　馬頭琴

4 コロナより　新年会へ　進次郎　宏
4 日本語も解らぬ総理はどこの人　北の山
4 家計簿にアベノミクスが火を付ける　大峰
4 年金で株を支えて私は細る　北の山
4 コロナより 会食重視で パンデミック　高坊
4 逃げ得を地で行くカネの持つ魔術　亀公子
4 コロナ風邪　桜見る会　無観客　広助
4 いただくは腐った頭情けなし　林
4 私物化の政治で戦後史汚してる　林
4 夜間時短　契約解除を　ちらつかせ　馬頭琴
5 新肺炎集会喰って蔓延す　白眞弓
5 安倍打倒その手もありかウイルス禍　白眞弓
5 官邸は検事の首をもてあそび　徹乗
5 人間をポイントなどで計るなよ　ダン吉
5 検査拒否たらい回すは厚労省　徹乗
5 ウソをつくオラが総理の腹黒さ　林
5 トランプと阿吽で自衛隊も派遣する　大峰

---

5 官邸を守る検察縛りの禁じ手　立東爺
6 小異より　大同つなぎ　スクラムへ　宏
6 官邸の「もりかけ桜」根腐れす　林
6 三権が　「閣議」決定　独裁へ　宏
6 ひたすらに築きしウソ山崩れ出し　林
7 忖度に縛られ初動遅くなり　立東爺
7 パラサイトにリアル感じる病む社会　徹乗
7 北の鉄路　暮らしの足を　もぎとられ　馬頭琴
7 ウイルスに細菌兵器の影を見た　亀公子
7 ひたすらに証拠を隠して私は無罪　北の山
7 官邸に国難住みつき七年目　立東爺
7 不祥事をこねくり回す二枚舌　亀公子
9 埋め立ての杭は足らない地獄まで　大峰
9 当て馬にされて出て行く日本丸　亀公子
12 **質問の図星に切れる腐る鯛**　立東爺
12 **お神輿を担ぐ奴には札の束**　亀公子
12 **シュレッダーしっかり抱えて答弁し**　大峰

自選句

◆自選句　中野　林

戦争を挑発してる護衛艦
またしても死出の山行く護衛艦
いつもの手困った時の反共節
改憲をしたかのように派兵する
宇宙から米にお礼の札を撒く
明らかに強盗まがいの消費税
国民の命削ぎ取る消費税

◆自選句　前田大峰

トランプは黒和牛にかぶり付き
昆虫も雑苔も生えない種を捲く
自公の地下茎選挙の度に肥え太り

おたより

◆おたより　岩佐ダン吉さんより

「薄明かりの中で彬の句碑（顕彰碑）を見つめていると、暁の日を見ることもなく二十九歳の若さで獄死した彬の熱い思いに涙が溢れてきました」

写真一枚彬の句碑に手を合わす

日川協理事長の小島蘭幸さんが『川柳塔』（20年2月号）で話していました。梅が満開。遙か先に関西国際空港が見える岸和田市の山手、春はまだ少し先のようです。

投稿

腐敗に憤っている自分
川柳でおだやか冷静に

若林　高坊

私が川柳をやり始めたのは、つい去年の秋頃になります。日頃より、よく講演会などでお会いしていた代表にお誘いいただいたのが始まりです。

それまでは川柳というものにほとんど携わった事がなく、サラリーマン川柳などが頭に浮かぶくらいでした。

今のこの生きづらい世の中を何とかしたい、しな

きゃいけない。そんな自分の思いを川柳にしてみたらどうか？　と言われ、やってみようかという感じと共に、世の中、今の政権の腐敗に対して、どこかいつも憤っている自分の心が、少しはおだやかで冷静にもなれるかもしれないなぁと思いました。

特定秘密保護法、安保法制、この二つは特に、全国の弁護士会全てが違憲だと言っている悪法です。国会の質疑応答による黒塗りの資料、時には一面全てが真っ黒になっているものも珍しくありません。安倍政権による法の悪用そのものではないでしょうか？

自衛隊による駆けつけ警護もその一つです。南スーダンでのＰＫＯ派兵、この時に五十六名の隊員が〝自殺〟をされています。この時に何が起きていたのか？

「戦闘は無かったが衝突はあった」としています。その為に日報も隠蔽する必要があったのだと思います。

「安全な地域に派兵した。」と言う発言を守る為、戦死扱いもされず、事故死扱いされているのではないでしょうか？

そして、今、自衛隊はまた新たな派兵先に向かっています。ホルムズ海峡の船舶の調査、研究という名目で、Ｐ３Ｃ哨戒機２機、戦艦たかなみ、隊員２００名あまり。これは世界から見たら！　日本の多国籍軍参加、米国との諜報活動ではないでしょうか？

この派兵を中止に導く為にも、仲間の皆様と共に集まり、金沢駅前で〝中東派兵NOスタンディング〟に参加し、道行く人達に精いっぱい訴えています。

国会では、桜を見る会、ＩＲ問題等、次々に不正が出続けます。更には、黒川検事長の定年延長を閣

議決定で決めるという憲法違反までも。
もうこの日本において、三権分立すら無くなってしまったのかもしれません。
しかしながら、声を上げるのをやめるわけにはいきません。自分の子供達の世代に、少しでもまともな世の中を引き継ぐ為に。

川柳でも皆様に目を通してもらった時に、その状況が思い浮かび、わかりやすく伝わるよう、五七五に思いを込めていきたいと思います。
皆様に追いつけるように頑張ります。

ほのぼの川柳

毎日がコロナのせいで不自由だ　神田　鯛
うれしいな逆上がり出来ニコニコだ　神田　鯛
もうすぐだ四月になれば一年生　神田　鯛
困るのはパンツのゴムと爪の延び　寿賀子
御馳走をお口汚しという文化　寿賀子
百薬の長は歩いて水ガブリ　立　東

自句自解　日下　宏（札幌）

「死の商人　爆買いさせて　丸々と」会報№678

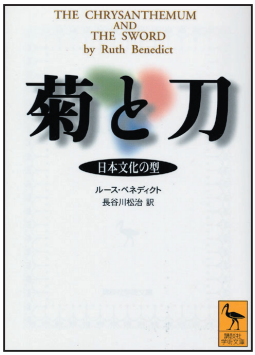
この句は、死を売る、作る軍事産業と時の政府との癒着と利害関係を浮きぼりにしたいと詠みました。
実は学生時代、この「死の商人」という言葉（訳も含め）を広められた当時、岡倉古志郎教授（国際政治、アジアアフリカ、中南米の研究家）の授業で強調され、ベトナム戦争終末近しの頃、とりわけ米・日の軍事産業が国難と称し、自分たちの利害拡大するためには、市民（庶民）等を犠牲にし、利益をハイエナの如く誘導するのがマスコミを含めて、常なることを力説されていたことを半世紀を経た今の我が国がより右へシフトされていることに危機を感じています。

道警が昨年5月、参院選中、アベ総理が来札し、大通公園、駅前で一般市民の声〝アベ辞めろ〟の野次、また別の方が〝増税反対〟の声を出した男女（計9名）のショッピキをTVのニュースで知りビックリしました。「**ヤジさえも　ショッピキ対象　令和かな**」「**警察がアベ辞めろの野次　憲兵に**」と肌が身震いした訳です。

「**トランプを〝菊と空母〟でオモテナシ**」No.680

これは本来『菊と刀』（ルース・ベネディクト米国の文化人類学者）よりヒントを得て、刀をモチーフに「空母」の上でもてなすという現実と皮肉を、更に核の傘、「**再稼働人命よりも　核神話**」No.684、「**中東へ　わが軍（自衛隊）巡視　傘のもと**」。この「傘」自体、ノウ・アンブレラ《傘はあっても実は有害かつ本当の意味で守ってくれる傘は不確かなもので、さらに将来的には核保有を必要という勢力（人々）もあり、これ以上「**沖縄を捨て石、要石、令和とて**」を許してはならない。更に日本のいずこにも基地、オスプレイ等の不必要、新型コロナウイルスの平和づくりを「**九条こそ　世界遺産に認定を！**」No.676　を心より希求しております。

（今後ともよろしくお願い申し上げます。）



論考　『ますらおぶり』『たおやめぶり』について考える

寺内　徹乗

1月号で「和」の編者、周立東爺氏が、「ますらおぶり」と「たおやめぶり」について論じた。「ますらおぶり」は、江戸時代の国学者・賀茂真淵（一六九七～一七六九）が「和歌の理想は万葉集の中に見いだされる」と「ますらお（益荒男）ぶり」

を高く評価され、『古今和歌集』など、万葉集以後の和歌は「たおやめ（手弱女）ぶり」と見下された。真淵が万葉時代に帰らなければならないと主張した背景には、江戸中期、「武士たるもの、恋愛を文学にしてはならない」というような風潮が生まれたことにあるらしい。しかし、実際のところ、『万葉集』が「ますらおぶり」一色かといえば、そうとも言えず、恋愛の歌も多く含まれる。また、真淵の弟子、本居宣長（一七三〇～一八〇一）は『源氏物語』を高く評価し、「たをやめぶり」も日本の文化の大切な流れであるとして、真淵の一方的な主張を批判した。

ここまでが前回の復習だ。

では、万葉集にある「ますらおぶり」とはどういうものか。万葉集の編者、大伴家持（おおとものやかもち、七一八？～七八五）の詠んだ有名な歌を紹介する。『万葉集』の原文は万葉仮名で書かれ、現代人にとってかなり読みにくいため漢字仮名文で書き直したものである。

（前略）大伴の　遠つ神祖の　その名をば　大来目主と　負ひ持ちて　仕へし官　海行かば　水漬く屍　山行かば　草生す屍　大君の　辺にこそ死なめ　かへり見は　せじと言立て　丈夫の　清きその名を　古よ　今の現に　流さへる　祖の子どもぞ（中略）梓弓　手に取り持ちて　剣大刀　腰に取り佩き　朝守り　夕の守りに　大君の　御門の守り　我れをおきて　人はあらじと　いや立て　思ひし増さる（後略）

（現代訳）

（前略）大伴の遠い祖先のその名を大久米主（おほくめぬし）と呼ばれてご奉仕してきた職なので、「海を行くなら水に浸かる屍（しかばね）となり、山を行くなら草むす屍となっても、大君のお側で死にましょう。決して後ろを振り向くことはありません。」と誓い、立派な男として清いその名を　昔から今まで伝えてきた、その祖の子孫なのです。（中略）「梓弓（あづさゆみ）を手に持ち、剣大刀（つるぎたち）を腰につけ、朝も夕も大君の御門をお守り

するのは私たちをおいて他にはないのです。」とさらに誓い、その思いは強くなるばかりだ。（後略）

この歌の一節（傍線部分）は、日中戦争が始まった一九三七年、日本政府が国民の戦意を鼓舞するために作曲された「海行かば」の歌詞の元になったもので、国民に広く歌われ、太平洋戦争時はラジオニュースで玉砕を伝える冒頭に流れた曲でもあった。私は、これこそまさに「益荒男（ますらお）の中の益荒男」とも言うべき歌だと思うが、皆様はどう思われるか。

ただひとつ誤解のないように付け加えたい。家持は『万葉集』の中に「たおやめぶり」の作品も数多く残す。これは家持が、若くして亡くした妻を詠んだ歌である。

今よりは秋風寒く吹きなむをいかにか独り長き夜を寝む

（現代語訳）昔こそ外にも見しか我妹子が奥つ城と思へば愛しき左保山

（現代語訳）昔こそ関係のない場所と見ていたけれど私の妻の墓と思うと愛しい佐保山だ

つまり家持は「ますらおぶり」と「たおやめぶり」の両面を持ち合わせていたのである。さて話を戻せば、先ほどの「海行かば」の歌は「ますらおぶり」の代表歌であることを先に述べたが、同じ『万葉集』の中に、同じ軍事物を詠んだ歌に、「たおやめぶり」の歌が残る。いにしえの無名の召集兵の詠んだ歌、「防人歌（さきもりのうた）」である。実際は知識階級の者が防人の気持ちになって詠んだものや、彼らに添削されたものもあるかもしれないが、防人たちの正直な心情を詠んだものと解釈したい。

葦垣（つるぎたち）の隈処（くまと）に立ちて我妹子がく袖もしほほに泣きしそ思はゆ

（現代語訳）葦で作った垣根の人目につかない物陰に立って、愛おしい妻が袖もしっぽりと泣いていたのが思い出されてならない。

この歌は今から千三百年前の奈良時代に詠まれたものであるが、昭和の時代の召集兵とそれを見送る家族の情景も重なるし、令和の時代も中東派遣される自衛隊員を泣いて見送る妻たちの報道映像とも重なる。この歌には時代を超えて私たちの心に訴えるものがある。「防人の歌」は八四首が今に伝わるが、そのいくつかを紹介したい。

白玉を手に取り持して見るのすも家なる妹をまた見てももや

（現代語訳）真珠を手にとってしげしげと眺めるように、家に残してきた愛おしい妻を再び眺めたいものだ。

韓衣裾に取りつき泣く子らを置き　てそ来ぬや母なしにして

（現代語訳）渡来人風の着物の裾にすがりついて泣く子どもを置いてきてしまった。母親もいないのに。

父母が頭かき撫で幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる

（現代語訳）父母が別れ際に私の頭をかき撫でて無事でいろよと言って下さった言葉をどうにも忘れることが出来ない。

ひな曇り碓氷の坂を越えしだに　妹が恋しく忘らえぬかも

（現代語訳）日が曇って薄日がさすという碓氷の坂を越えるとき、愛おしい妻が恋しくて、忘れようにも忘れられない

草枕旅の丸寝の紐絶えば吾が手と付けろこれの針

持し

（現代語訳）草を枕の旅先でごろ寝をして紐が切れたら私の手だと思ってこの針を持って縫い付けてください。（妻が夫に宛てた歌）

我が妹子が偲ひにせよと付けし紐糸になるとも我は解かじとよ

（現代語訳）私の愛おしい妻が私を偲ぶよすがにして下さいと言って付けてくれた着物の紐だ。たとえ糸のように細くなろうとも解くものか。

行こ先に波なとゑらひ後方には子をと妻をと置きても来ぬ

（現代語訳）行き先に波よ高くうねらないでおくれ。後方には子や妻を置いてきたのだから（船の中で詠んだと思われる歌）

海原に霞たなびき鶴が音の悲しき宵は国辺し思ほゆ

（現代語訳）海原に霞がたなびき、鶴の鳴き声が悲しく聞こえる。日暮れになるとしきりに故郷を思いだす。

家づとに貝ぞ拾へる浜波はいやしくしくに高く寄すれど

（現代語訳）故郷の家の土産にしようと思って貝を拾っている。その浜に波がしきりに、高く押し寄せてくるけれど。

布多富我美悪しけ人なり急病我がする時に防人に指す

（現代語訳）私の土地の長官は意地の悪いお人だ。急病にかかった時に私を防人に指名するのだから。

戦前の日本で、赤紙が来たときにこの「布多富我美」の歌のような権力者に対する不満を詠ものなら、逮捕されただろう。また、防人の歌に多くあるよ

うな故郷や家族を偲んで詠んだ作風も、国民を厭戦ムードにさせるとして、検閲に引っかかるだろう。

一方で戦時中、「ますらおぶり」の詩、短歌、俳句、川柳はもてはやされた。歌人・斎藤茂吉は「国こぞる大き力によこしまに相むかふものぞ打ちてし止まん」と詠み、日露戦争時に「君死にたまふことなかれ」と詠んだ反戦歌人、与謝野晶子も太平洋戦争が始まると「**強きかな天を恐れず地に恥ぢぬ戦をすなるますらたけをは**」「**水軍の大尉となりて我が四郎み軍（いくさ）にゆくたけく戦へ**」と「ますらおぶり」の歌を詠んだ。当時、鶴彬たちの「たおやめぶり」の哀歌、風刺歌は、戦争の同調者から見れば、非愛国的であり、けしからん川柳であり、事実、糾弾され、告発されたことは歴史が語るところである。

これに比べ、千三百年前の日本人は実におおらかであった。家持は軍政を司る貴族の家に生まれ、兵部少輔、兵部大輔という役職を歴任した。つまり家持は、防人の監督者という立場でありながら、防人の目線に立ち、このような歌を歴史に残したのだ。

さて、江戸時代中期に荷田春満（かだのあずままろ、一六六九～一七三六）により国学が興り、その弟子、賀茂真淵は『万葉集』で「ますらおぶり」に帰れと論じ、その弟子、本居宣長（一七三〇～一八〇一）は、『古事記』の神話や『源氏物語』の「もののあはれ」を論じ、「たおやめぶり」も大事だと軌道修正され、宣長を研究した平田篤胤（ひらたあつたね、一七七六～一八四三）は「復古神道」へと展開させた。この篤胤の思想は明治維新以降、天皇を神とする国家神道となり、靖国神社の英霊信仰とも深く結びついた。古代の「海行かば」の歌にある「ますらおぶり」的なものが、近現代に入り日本が引き起こした戦争の中で、一つにつながるのである。

和の同人で前代表であった岩原茂明氏がこの「ますらおぶり」の意味を深く考えて使っているのかは不明だが、岩原氏が「これからは『ますらおぶり』

一本でいく。「和」は『たおやめぶり』だ」と批判したことについては、「防人歌」を高く評価し、鶴彬の川柳を近現代の「防人歌」だと解釈している私にとっては、むしろ光栄である。岩原氏が「ますらおぶりだ」と言われたところで、私からは「どうぞ、ご自由に」と答える他ない。（了）

シベリア抑留の記録 ⑯

「在ソ三年　生と死のドラマ」

故・秋山茂氏の遺稿より

ソ連での生活をふり返ってみる。とにかくソ連人はよく働らく。また独逸捕虜と日本人捕虜、ソ連人の囚人、それぞれに対する扱いなど。日独両国の捕虜に神経を使っていた。とくに陸続きの独逸人は脱走なども多い。日本人捕虜は羊のようである。

われわれは一度囚人達と一緒に煉瓦工場で、焼いた煉瓦の取出し作業をしたが、此処で思わぬ災難にあった。

というのは、先ず最初に盗られたのが日本人になら誰でもよくやる腰にはさんだタオルで、休憩中など彼等は何気ない素振りで近付いたと思う間もなく一瞬の隙にさっと抜き取るや煉瓦焼の窯の穴の内部に駆け込み、内部に待っていた次の男に渡し又次の奴に、というように第三、第四の男に手渡し最初に盗った奴は平然と出て来る。

こうして彼等は飯盒から帽子まで掠奪してリレー式に隠す始末に監視の看守に抗議したが、ソ連での窃盗は現行犯でないと逮捕されないらしく結局「盗られ損」で済んで了った。

同じ服装をした初めて見るソ連人の顔は、皆同じように見えてどれがどれやら判らないし始末に困ったものである。また八月終り頃、ウクライナ方面から貨車にバラ積みで送られて来たという直径が十五cmから二十cmくらいの西瓜の取り卸し作業を見たことがある。

西瓜の作業は、積載貨車周辺の物影や車輛の下

などには年齢十二、三歳から十五、六歳と思われる子供達が十名余りも忍び寄っていて、屍体に群がるハイエナのように隙あらば盗って逃げようと狙っていた。然し小銃を持った二名の監視人のため仲々盗れずにいたけれ共、二、三回掠奪されたらしく、追い駆ける様子は西部劇の映画を観ているような状態であった。

6　恐怖の自然林

旧満州の老峯山脈の一部に白色地帯と呼ばれて日本軍が使用した五万分の一の地図にも記載出来ず千古斧鉞(せんこふえつ)を入れてない自然林があったが、シベリヤ山岳部の自然林はそのスケールの大きさに於いて満州の比ではない。然もこの自然林をもつ山々が峨々(がが)たるけわしい山かと云えば決してそうではなく、標高三、四百メートルと思われる山の頂上は一般に台上平坦で起伏といっても日本の海岸の砂丘地に見る程度のもので地殻の皺のようにところどころに縦や横に長く連なっているのである。土質は殆んど壌土か砂質壌土で、場所によって粘板岩が風化して出来た土もあるが、これは極めて一部で岩石というものは見当たらない。このような自然林に一歩足を踏み入れて見れば直径一米以上は優にあろうかと思われる大木が鬱蒼と繁って陽の光を遮断し、ところどころに直径が人の背丈ほどもある大木が右に左に朽ち倒れ、立木の裾には僅か乍ら白樺やシベリヤ赤松がひょろひょろと二十米程に伸び、辛うじて余生を保っているのが見られた。

地表は一面敷きつめたような苔に覆われ歩くと少しふわふわした弾力があり、薄暗い密林の内部は大木が不規則に密生しているため、大体十米以上の見透しは殆んど不可能でしーんと静まり返って深海を思わすような不気味さであった。

或る時われわれは密林の入口附近に小さな鬼百合に似た赤い百合の花を発見し小枝を拾って根元

を掘ったところ、子供の掌ほどの百合根が転がり出た。葉茎や花は貧弱だが長い年月に亘る風雪に耐へて育った球根が非常に大きいことを知り、同時にそれから後、この百合根が空腹にあえぐ伐採地の日本人捕虜の貴重な食糧となり、われわれは僅かな時間でも疲れた体に鞭打って危険を覚悟で百合根を求めて密林に足を踏み入れたのである。

密林の此処彼処に咲いている紅色の可憐な百合の花を求めて立木の間を通り抜けたり、朽ちた木を乗り越へ、或は又横に廻ったりしている間に方向感覚を誤り、どちらから進入したのか判らなくなって了う恐ろしい魔の森林であることを知らなかった為、悲劇が相次いだ。後で聞いたところではソ連人の樵(きこり)ですらこの密林地帯に這入る時は斧で立木の幹に傷を付けて、行き帰りはこの傷を目印として林縁に出て来るのだという。

一旦迷い込んだが最後、一箇月や二箇月歩いたところで、白日の下に出られるものではないという無限に近いシベリヤの森林地帯である。

ところが、伐採中のある時、一名の日本兵(召集兵)が百合根を掘りに行って迷い込んで了った。中隊では直ぐソ連軍の命令で全員が林縁に集まり、天を焦がす程の焚火をしながら徹宵(てっしょう)。この兵隊の名前を反覆呼び続けたが反応がなく、捜索隊を出そうにも二次遭難がある為、夫れも出来ず殆んど絶望と思われていた。行方不明になってから三日目の夜、われわれが重苦しく祈るような気持ちで居るところへ奇跡的にソ連人の樵に救われて帰ってきたものの、彼は既に歩行の出来る状態ではなく、直ぐ何れかに護送されて行った。その後のことは皆目判らない。

この事件があってから百合球の採取はソ連から禁止されたが、生きるため目前に危険はあっても割合容易に手に入る百合根がある以上、放っておく筈はなく、各自こそこそとソ連兵の眼を盗んでは掘り続けた。

（つづく）

訃報

故・秋山茂氏夫人 芳子さんが、去る2月4日、百四歳の天寿を全うされました。旧満州で敗戦を迎え、大混乱の中、一人で四人の子どもを守り帰還、茂さんは大変感謝されておられたそうです。お疲れさまでした。合掌。

戦後の秋山ご一家の様子は長女の冨沙子さんが会報№六七〇～六七三（2018年7～9月）に紹介。なお3月1日、お母さんの最期の様子を北陸中日新聞に綴られていました。冨佐子さんの同意をいただきましたので紹介します。

大往生の母へ「ありがとう」

坂本 冨沙子 83（金沢市）

立春というのに金沢に雪は全くなく、空は真っ青に晴れていた。

その日三姉妹は施設の医師から母の容体を聞くことになり久し振りに顔をそろえた。「酸素マスクをつけてもお母さんは無意識に手で払いのけてしまう。やっとの思いで点滴の針を差し込んでも、すぐ払いどけてしまう。もうどうしようもありません。ここまできたら自然死という形でよろしいでしょうか」とのこと。子どもたちがどうこう言っている時ではないと悟った。

三人でベッドの母の顔をのぞくと、一人一人の顔を穴のあくほど見ていて、空を指さし、晴れているから連れ出せとベッドの上で動く。「動いちゃ駄目。また今度ね」と押さえつけるようにして帰ってきた。その夜、母は夕食もとり百四歳で大往生となった。

最後に握った母の手の温かさが今も私の手に残り、その夜、母の人生を思い一晩中泣いた。大泣きした後、心の中で「ありがとう」を何度もつぶやいた。

『戦争前夜抄』休みます。

「プロレタリア文学運動の盲点」改め「戦争前夜抄」は紙面満載の為、休みます。次号は、石川啄木の〝詩〟から「戦争前夜」を考えます。（周）

編集後記を兼ねて

▼降って湧いたような新コロナウイルス。初動が遅すぎた日本。安倍総理が突然言い出した「全国の学校閉鎖」。▼全国がなびく中、「健康面でも学校が最適」と休校を撤回した栃木県茂木町にエールを送る。金沢市長は当初、休校しないと表明していたが、その後転換。意志決定の手続きはどうなっているのか？▼「国難は官邸にあり」というのがいよいよ鮮明になった。緊急事態法成立を持ち出す官邸の監視には川柳が似合うかもしれない。本質・本音をズバリと言葉にしたい。▼「緊急事態法」は憲法を停止させ、かつてワイマール憲法を停止させヒトラーの独裁国家を実現させた。今でも充分独裁性を強めている安倍総理。その道を歩ませてはならない。▼facebook（フェイスブック）で出会った「主張するネコたち」を表紙に紹介した。このネコたちは読み手を笑わせながら考えさせる。これは川柳の手法、精神でもある。ネコも頑張っている。（周）

3月例会ご案内（毎月第4木曜日）

◆例会　3月26日（木）　◆投稿〆切：23日（月）
◆課題「学」　3句以内　◆自由吟：5句以内
◆自選吟、連作、エッセイ、川柳論、ご意見などもお願いします。川柳に関する資料などもご紹介下さい。
◆句報を持参下さい。例会で話し合います。
●投稿 FAX（076）254-0762　郵送は下段住所へ。
●メールアドレスは下段に。

「和川柳社」会報 会員募集しています！

同　　人：4000円/年
投句/購読：2000円/年
★会報の他に、関連資料などもお送りします。

和 川 柳 社　〒920-0335 金沢市金石東2丁目15-30（渡辺 寛）
電話 FAX：076-254-0762　PC-mail：kananabe@popolo.org
携帯：090-9445-1302　**携帯** mail：kan-wata@i.softbank.jp
振込先：北國銀行中央市場支店　#191 普通 640「和川柳社」

発送に協力いただいています。▼《食育のグリーンノート&土の音工房《オカリナ制作》・上村 彰》